

教育と研究を両輪とする大学教育の在り方について  
大学分科会（第 155 回）における主な御意見

【総論】

- 個別個別には正しい内容であっても、お互いに矛盾しているものもあり、全体の位置付けについて整理することが必要である。
- 新しい社会構造の変化に大学どう貢献するのか、そのための教育と研究の両輪であるという考えを持って、社会発展というようなもう少し幅広い視点で目的化を示すことが必要ではないか。その目的化が明確になったときに、教員評価という観点盛り込まれることは大きな意味を持つと考えられる。
- 論点整理を踏まえて、研究と教育という部分で骨格を作り、関連する事項を整理するなど、それらを構造化したポイントが分かる資料が必要である。

【大学における「教育」と「研究」の両輪】

（教育と研究の関係）

- 学士課程においても、課題解決型や課題探究型のプロジェクトや研究を実施しており、学生自身がそういう発想や力を身に付けてく側面もあることを認識することが重要である。
- 大学院については、研究室での研究に特化してしまい、もっと幅広い体系的な知識とか学問領域の周辺情報について、広い視野を身に付けるコースワークが重要であり、教育と研究を両輪とする大学教育という場合、学部レベルでの課題と大学院レベルでの課題は異なる面があるのではないか。
- 大学の学部と大学院のことだけでなく、短期大学や専門職大学に関わる部分についても、研究の比重は異なるものの、教育と研究の両輪という視点があることから何らかの整理が必要ではないか。
- 大学の中で教育と研究というものが考えられるのは、学生を擁しているからだと考えられる。学生の位置付けであるとか、学生はどうあるべきかということについての議論も必要なのではないか。学生自身がサービスの受益者という受け身になっており、学生の主体的な関与ということを導き出すことは重要なポイントだと考えている。

## 【大学教員の在り方】

### （大学教員の採用・評価）

- テニユアトラック制度について、日本では十分に熟知されておらず、制度が定着していないのが実態である。例えば、教育と研究の両輪が必須であるテニユアラインの教員というものと、研究あるいは教育で優れた能力をもっているというノンテニユアラインの教員というような制度化も考えられるのではないか。
- 教員評価については、長年大学の中でも大きな課題として向き合っているものであり、教員の評価の在り方について盛り込まれていることは重要であるが、教員評価を実施し、その結果がどのように教員に効果を及ぼすのかという評価の精度ということを強調することも必要ではないか。
- マネジメント全般に関わる問題にもなるが、教員の評価基軸というものを入れ込み、教育と研究の両輪を成り立たせていくという視点も必要なのではないか。

### （教育研究機能の活性化）

- 今後の大学教育においては、学問の知識を踏まえて議論を行い、自ら考えていく、その仕組みを構築していくことが必要になってくる。その場合に、教員の役割も変化することが想定され、コーチングだとかファシリテーターという能力がより一層求められるのではないかという課題も考えられる。

## 【大学運営マネジメント】

- 教育と研究の質を高めるためには、根本的に大学の中を変えていく努力が必要になるのではないか。つまり、大学経営そのものの仕組みについて考え直すことが必要であり、必ずしも教育者や研究者が立派な経営者なのかという点についても考えておくことが必要ではないか。

## 【その他】

- 教育と研究を両輪として人材育成と科学技術の発展に資する大学とあるが、科学技術となると人文社会科学の役割が見えにくくなってしまうので、科学の発展に資するという表現の工夫が必要ではないか。
- 社会への貢献やアピールという観点では、必ずしも教員だけではなく、職員

も入るわけであり、大学のシステマティックな機能についても触れておく必要があるのではないか。

- 大学の教育と研究を両立させていく在り方から、その成果を社会に還元していくという観点も重要な論点になるのではないか。自らが研究のマネジメントを行うことができる人材を大学が育成し、その人材があらゆる産業界の場で実際に社会実装されていくという流れが見えてくると良いと考えている。